

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	田ノ口 正悟
<p>主 論 文 題 名： The Power of Nothingness: Destruction and Reconstruction of American Ideals in Herman Melville's Writings. (虚無の力——ハーマン・メルヴィルの描くアメリカ的理想の破壊と再創造)</p>			
<p>(内容の要旨)</p> <p>序章 Creating Something out of Nothing</p> <p>19世紀アメリカを代表するロマン主義作家ハーマン・メルヴィル(1819-91)は、『白鯨』執筆中、代表的エッセイ「ホーソンとその苔」(1850)を発表する。そこで彼は、師として敬愛するナサニエル・ホーソンの才能を「闇の力」(“the power of blackness”)に見出す。美しい世界を描きながらも、彼の物語は人間が「生来持ち合わせている墮落と原罪」というカルヴィン主義的闇を内包するからこそ唯一無二なのだ。しかし、その翌年に出版した『白鯨』において、メルヴィルは、ホーソンへの憧れを屈折した形で表現することになる。第36章「後甲板」において、エイハブ船長は世界をあやつる邪悪の根源と対峙するために、白鯨という「仮面」を打破するように船員を鼓舞する。しかし一方で彼は、驚いたことに、その仮面の背後には「何もないかもしれない」とも発言する。</p> <p>エイハブの自己矛盾にメルヴィルの厭世観を見ることはたやすいだろう。しかし、本博士号請求論文の目的は、メルヴィルのニヒリズムへの傾倒を「虚無の力」(“the power of nothingness”)と名付け、その両義的な意義を論じることにある。彼の虚無の美学は、デビュー作『タイピー』(1846)から遺作『ビリーバッド』(1923)にいたるまで、自死や捕囚、変装、自己棄却 (self-annihilation)のような描写を通じて、一貫して見られる。本論文は、「虚無の力」を内包するメルヴィル作品を、アメリカ的理想——具体的には、民主主義的平等、自律的個人、白人的主体性——の批判と再創造として読解することを目的とする。すなわち、メルヴィル作品が描く、安定的な社会的立場やアイデンティティを失う登場人物の嘆きや怒りは、キリスト教や民主主義といったアメリカ社会の根本理念が抱える問題や矛盾を明らかにする一方で、それらを再構築しつつ改めて理想を提示し直すような原動力にもなっているのである。</p> <p>このことを論じる前段階として、序論ではまず、レイモンド・ヴィーヴァーの『ハーマン・メルヴィル——水夫と神秘』(1921)とD.H. ローレンスの『アメリカ古典文学研究』(1923)を取り上げながら、1920年代に始まったメルヴィル再評価における中心的著作群が、いかに、破滅的に見えるメルヴィル作品の結末に創造的可能性を見出していたかを論じる。その後、『白鯨』と「バートルビー」(1853)を読解しながら、メルヴィルがどのようにして「虚無の力」を構</p>			

築していったのかをたどる。また、メルヴィルが深く影響を受けた文物——聖書、シェイクスピア『リア王』、トマス・カーライル『衣装哲学』、そしてラルフ・ウォルドー・エマソンの著作群——を紐解きながら、メルヴィルの虚無の美学が、19世紀中葉の文学・文化と呼応していたことを考察する。さいごに、F.O. マシーセンとチャールズ・オルソンから始まり、ドナルド・ピーズを経由して、ジョン・ブライアントに至る『白鯨』研究を概観しながら、これまでの研究がメルヴィルの虚無的描写にアメリカ的主題を反映しようとする試みであったこと、アメリカ文学の枠組みそのものが虚無の上に多様な解釈を付す行為であったことを論じて、本研究の意義を確認する。本論文は序論と結論を合わせて全6章から成るが、以下では、序論以降の概要を示す。

第1章 A Dead Author to Be Resurrected: The Ambiguity of American Democracy in *Pierre: or, the Ambiguities*

「ハーマン・メルヴィルは正気を失った」。これはメルヴィルの第7小説『ピエール』(1852)の書評である。本作を「狂人の妄言」とこき下ろしながら、この評者はメルヴィルに、「金輪際執筆から離れるべきだ」と警告する。メルヴィルは、『ピエール』の出版によって作家としての死をむかえたといえよう。本作によって生じた苛烈な批判から、以降彼は、自分の名前を伏せて創作活動をするようになる。主人公がメルヴィルと同じ作家であったことから、これまでの研究は、本作最後に示される彼の自死をニヒリスティックな悲劇として解釈してきた。じっさい、F. O. マシーセンは、ピエールの死後には「その世界に取って代わるようなことは何も起こらない」と主張している。

なるほど、ピエールの死は悲劇的だ。アメリカの田舎にある広大な荘園サドル・メドウズにおいて、許嫁と幸福な生活を送っていた彼の人生は、血を分けたきょうだい自称するイザベルとの出会いによって急変する。彼は、尊敬する父が母以外の女性と私生児をもうけていたことを知り、裕福な家族と決別する決意をする。彼はイザベルを連れてニューヨークへと越して、「惨めにも打ち捨てられてきた真実を世界に知らしめる」ために作家となる。しかし、その崇高な理想は達成されることなく終わる。彼は出版社からの手紙を受け取り、心血を注いだ作品が「不道德な無心論者」であるヴォルテールからの剽窃にすぎないと指摘される。世界に失望した彼は、殺人を犯して刑務所に送られて、イザベルとともに命を絶つ。しかし、ピエールの死はある種の両義性を内包していることは見逃せない。現に彼は、イザベルとともに死ぬ直前に「いま生きることは死で、死ぬことこそが生である」と言う。

本章では、ピエールの両義的な死に、メルヴィルのアメリカへの態度が反映されていることを論じる。『タイピー』でデビューしたメルヴィルの作品の多くは、ヤング・アメリカ運動と区分される時期に執筆された。19世紀中葉のアメリカは、建国の父祖を

神格化しながら、旧世界からの政治的文化的独立と民主主義的平等の国内外での実現を目指して、愛国主義的運動を展開していた。しかし、そのような理想は矛盾を内包していた。平等の実現を希求しながらも、アメリカ社会は、奴隷制や西漸運動を通じて、支配者／被支配者の不平等な関係を残存してしまっていたのである。ワイ・チー・ディモクはピエールの執筆行為を“sovereign authorship”と呼びながら、そこに、同時代アメリカの矛盾が反映されていることを喝破した。つまり、平等の実現を望みながらも、ピエールの創作活動は、抑圧者／被抑圧者の関係を再生産してしまうのである。しかし、ピエールのみならず、イザベルの創作行為に着目することで、アメリカ民主主義への批判の書として読まれてきた『ピエール』の新たな側面を明らかにすることができる。主人公の両義的な死が体現するメルヴィルの「虚無の力」を分析しながら、本章は、『ピエール』がアメリカ民主主義の批判と再生を同時に行なっていることを明らかにする。主人公の破滅はアメリカ民主主義の偽善を明らかにするが、それ以上にメルヴィルは、ピエールとイザベルの死のなかに、階級なき平等な世界の実現可能性を追求していたのである。

第2章 A Revolutionary Hero's Transatlantic Crossings: Destruction and Reconstruction of “Americanism” in *Israel Potter: Fifty Years of Exile*

1849年12月18日、ロンドンに来ていたメルヴィルは、ある書店でその町の古地図を買い日記にこう書きつけている。「私が、乞食のアメリカ建国譚 (“the Revolutionary Narrative of the beggar”) を書くときには、この地図を使うことにしよう」。結局、この構想が実現して第8小説『イスラエル・ポッター』が出版されるのは1855年のことになる。本作は、アメリカ独立革命の嚆矢となるバンカーヒルの戦いに従軍しながらも、戦場で負傷したために敵の捕虜になり、イギリスへと渡り50年近い放浪生活を余儀なくされた兵士の数奇な人生を描く。『白鯨』や『ピエール』の立て続けの失敗によって作家としての評価を大きく下げたメルヴィルだったが、『イスラエル』は比較的高い評価を得た。本作は矢継ぎ早に3回増刷されるだけでなく、ロンドンでは安価な海賊版が出版された。好意的書評も多く『ニューヨーク・コマーシャル・アドヴァタイザー』紙は、「アメリカ的情感」に満ちている本作が、「その愛国的な関心」によって「最も人気を博すことになるだろう」と述べている。

『イスラエル』が高評価を受けたのには、アメリカ植民地がイギリスから独立を果たしてから、メルヴィルが創作活動を行っていた19世紀前半にかけて、アメリカ建国にまつわる書物が多く出版された背景が関係している。例えば、ベンジャミン・フランクリンやジョン・ポール・ジョーンズなど建国の英雄に関する物語が世に出た。第二次独立戦争と呼ばれる米英戦争(1812-15)を経てイギリスからの独立の機運が再燃するなか、フランクリンの人生が物語る「依存から独立」へと至った個人の成功譚は、国家的物語として受容された。また、メルヴィルのタネ本になった

ヘンリー・トランブル著『イスラエル・R・ポッターの生涯と驚くべき冒険』(1824)のような、独立戦争に従軍した一兵卒に焦点を当てた物語も出版された。リチャード・ドーソンも分析してみせるように、ありふれた兵士の姿を「国家的愛国主義的アイデンティティの礎」として描出するそれらの物語を通じて、アメリカの読者は「過去の感覚を獲得し、自由と平等にもとづく未来への基盤として誇りを持つ」ようになった。つまり、これらの文物はイギリスから独立するアメリカの国家的アイデンティティを形成するために、個人の美德を国家的理念の象徴として示したのである。

本章の副題に掲げた「アメリカニズム」(“Americanism”)とは、メルヴィルが作中で用いる言葉である。メルヴィルの語り手は、タイコンデロガ砦の英雄イーサン・アレンの率直で気さく、愛情に溢れた「西部人の気質」を「彼特有のアメリカニズム」、すなわち「真のアメリカ的精神」と称する。当時流行した建国譚と同じく、『イスラエル』も個人の気質から国家を象徴する精神性、すなわち「アメリカニズム」を抽出しようとする。これまで、本作は、メルヴィルによるアメリカ的精神への批判の書として読まれてきた。父と子の決別で始まり最後までその和解は達成されないという物語の顛末を強調しながら、先行研究は本作を、建国の父祖を神話化する当時の愛国的歴史観に対抗する物語として読解してきた。しかし、本章が目的とするのは、『イスラエル』を単なるアメリカニズムの批判として割り切ることではない。むしろわたしは、本作が、主人公が「虚無と土くれ」の哲学を獲得するまでの放浪過程を描きながら、アメリカ的精神の流動性を示している点に注目する。たしかに、イスラエルの「虚無」の哲学は、アメリカという国家をその基盤となる個人の精神性から批判している。しかし同時に、本作はただの批判にとどまらず、アメリカニズムの再構築を志向しているのである。そこで本章は、メルヴィルが描く建国の父祖の両義的表象と主人公イスラエルの流動的主体性——より厳密に言えば主体性のなさ——に焦点を当てる。そうすることで『イスラエル』は、19世紀中庸にあってまさに現在進行形で形成されつつあったアメリカ的精神を批判しつつも再構築した作品として読解することができる。

第 3 章 The Revolutionary Ideals Manipulated: Re-figuration of the Founding Fathers in *Battle-Pieces and Aspects of War*

最終小説『信用詐欺師』(1857)を出版したのち、約10年間におよぶ沈黙を経たメルヴィルは、散文作家から詩人へと大きく経歴を変え、ニューヨークのハーパー・アンド・ブラザーズ社から『戦争詩篇』(1866)を出版する。フランク・ムーアの『反逆者の記録』(1861-68)を下敷きとして書かれたメルヴィルの『戦争詩篇』は、72の詩篇、注釈、そして散文による補遺を通じて南北戦争を描く。本作は、戦場において活躍した南北両軍の兵士や将校を描く前半部と、“Verses Inscriptive and Memorial”と題され、戦死した兵たちへの挽歌や碑文、鎮魂歌から成る後半部に分けられる。国家を二分する戦争の直後に

版された『戦争詩篇』は、戦争で勝った北部人に対して、南部人への敵意や憎しみを捨て、キリスト教徒としての寛大な態度を示すように呼びかける。またメルヴィルは、北部の勝利は物質的優位と兵士の数によりもたらされたとして、その勝利を相対化する。すなわち、北部人は、勝利をおさめたからといって南部人よりも「技能と勇敢さ」があるというわけではないのである。

1920年代に始まった初期メルヴィル研究は、彼の詩作品をあまり評価しなかった。じっさい、レイモンド・ヴィーヴァーによる伝記研究は、30年にわたるメルヴィルの詩作時期を“the long quietus”と評して、「彼は世界に背をそむけ、人生への反発から形而上学的なものに没頭していた」としている。しかし近年の研究では、政治から文学にわたる広範な射程から、メルヴィルの詩作品の意義が論じられてきた。『戦争詩篇』に関するこれまでの研究は、国家主義と超国家主義、奴隷制と再建政策、時系列順に並ぶ詩の意味、当時の芸術との関係、英詩の伝統の継承と逸脱など多岐にわたる。なかでも本作は、南北戦争前後のアメリカ社会との状況と関連が強調されてきた。

本章では、これまであまり注目されてこなかった観点から、『戦争詩篇』を再読する。具体的には、建国の理念の観点である。ジェイムズ・M・マクファーソンも指摘するように、南北戦争は勃発時から「第二のアメリカ独立戦争」と評されていた。すなわち、南北両軍がみずからの大義を正当化するために、独立宣言や合衆国憲法などに示される国家の根本的理念を流用したのである。メルヴィルの『戦争詩篇』は、南北戦争に並行して展開されていた、建国の理念をめぐるもうひとつの戦争への応答として読解することができる。

奴隷制反対の立場をとる北部人であるメルヴィルによって書かれた戦争詩は、南部による建国の理念の悪用を批判する。南部諸州は奴隷制を残存させるために、建国文書が示していた「最も鋭敏な自由への愛を畏にかけている」のである。しかしだからといって、彼の詩は単純に北部の勝利を賞賛しているわけではない。メルヴィルは南部の視点から戦争を再話することで、自由と平等を大義とするはずの北部人が持つ党派的愛国主義が、南部への憎しみを継続させて、南北間のヒエラルキーを生じさせる未来を予見する。とくに彼は、敗北した南部軍総司令官ロバート・E・リーをアメリカ建国の父祖であるジョージ・ワシントンと重ね合わせながら、南部の戦死した兵や壊滅した町の失われた声を代弁しようとする。本章では、北部人でありながら南部人のふりをするメルヴィルの虚無の美学を精査しながら、党派的愛国主義を回避しようとする彼の姿勢について考察する。そうすることで、南北戦争を単なる反乱 (rebellion)ではなく「革命」 (“revolution”)として描こうとする『戦争詩篇』の中に、メルヴィルが終生を通じて取り組んできた、建国の理念の批判的再継承を読み取ることができる。

第4章 The Curious Gaze on Asian Junks: Melville's Art of Exhibition

『白鯨』において、はじめてピークオド号を目の当たりにしたイシュメールは、その古さと奇妙な構造を読者に説明するために、「旧式のラガー船、巨大な日本の平底船 (“mountainous Japanese junks”)、オランダの小型ガレー船」などの外国船を引き合いに出す。この「日本の平底船」というモチーフは、本作において重要な役割を担っている。一方でイシュメールは、捕鯨船では「日本の平底帆船」からの「奇妙な漂流者」も働いていると語り、捕鯨船内の人種的多様性を強調してみせる。しかし同時に、この表現は、イシュメールの人種的他者への恐怖心をも明らかにする。オリエント世界から来たとされるエイハブの銚打ち・フェダラーについて、イシュメールはその外見の異様さに驚きながら、「難破した日本の平底船」からやってきたようだとする。エリザベス・シュルツは、ここに、イシュメールの「アジア人を軽蔑するかのような、悪魔的な人種差別的表象」を見出した。

しかし、オリエント世界からの乗組員を、クリストファー・ベンフィーがいうところの「究極的『他者』」として解釈することは、アメリカとアジア・太平洋地域の帝国主義二分法を強調してしまう危険性を内包する。そしてそれは、メルヴィルが描く人種表象の複雑性を見逃してしまうことにつながる。本章では、メルヴィルのアジア表象——とりわけ中国と日本——に注目しながら、白人的主体性を棄却してみせる彼の虚無の美学を検証する。とくに、メルヴィルが多くの作品で描写していたアジアの平底船のモチーフを、19世紀中葉の展示文化において読解しながら、いかにメルヴィルがアメリカ（植民者）とアジア・太平洋地域（植民地）の帝国主義的二分法を瓦解させようとしていたのかを論じる。

メルヴィルの帝国主義批判を考察するにあたって、所有の概念は欠かせない。エドワード・サイードは『文化と帝国主義』（1993）において、帝国主義を「持続的所有」に基づく物語として規定しながら、そこでは、「遠く離れた、時として知りもしない場所」を占有して、「奇抜で受け入れがたい人間」を支配しようとする想像力が働いていることを指摘した。ウォーレン・ローゼンバーグは、メルヴィルの南洋海洋冒険譚に登場する白人登場人物の「帝国主義的まなざし」 (“the imperialist gaze”) を分析した。その上で彼は、いかに見るという行為に、人種的他者をロマン化しながら支配／所有する帝国主義的欲望が反映されているかを考察した。しかし、メルヴィルにとって、太平洋はアメリカの「帝国主義的まなざし」を屈折させる空間でもあった。げんに、『白鯨』において、エイハブやスターバックらを乗せたピークオド号は日本近海で白鯨からの攻撃にあい沈没している。つまり、アジア・太平洋地域は、ロブ・ウィルソンも指摘するように「アメリカのファンタジーを明確にする空間」であると同時に、人種的他者を見て／支配す

る帝国主義的まなざしを転覆させる空間でもあるのだ。これらの研究を踏まえつつ、本章では、メルヴィルによる中国、あるいは日本の平底船に関するテクストを読解しながら、それらが、いかに当時のアジアへの人種的ステレオタイプを投影しながらも、帝国主義的主体（観客）と被植民的客体（展示物）の二分法を転覆させているかを考察する。

結論 Kaleidoscopic Nothingness: Yoji Sakate's *Bartlebies* and the Great East Japan Earthquake

本論文は、メルヴィル作品が内包する「虚無の力」が、どのように後続の世代の芸術に継承されていったかを確認して終わる。メルヴィル生誕 200 周年を迎える現在、彼の虚無の美学が最も端的に描かれている短編小説「バートルビー」は、多くの思想家や学者、あるいは芸術家をして、多様な解釈へと向かわせてきた。結論では、とくに、現代日本を代表する劇作家・坂手洋二による「バートルビー」の翻案作品を取り上げる。

坂手は、2015 年 6 月、慶應義塾大学三田キャンパスにて開催された第 10 回国際メルヴィル会議において行った独白劇を大幅に発展させながら、同年 8 月、自身が主催する燐光群にて『バートルビーズ』を上演した。本劇は、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災を題材としている。東北を襲った未曾有の大震災は、多くの死者と避難民を出すのみならず、福島第一原発では、今後長期にわたる除染作業が必要となる大規模な放射能漏れが発生した。坂手は、災害によって命を落とした人々、そしてそれによって“vital feeling”、すなわち生への活力を失ってしまった人々を、*Bartlebies*、つまりバートルビー的な人間として描出した。

「そうしたくないのですが」（“I would prefer not to”）という原作のセリフに重層的な意味を持たせながら、坂手の劇は、1980 年代高度経済成長期の東京と 2011 年東日本大震災後の東北を巧みに接続する。一方で坂手は、何をすることも拒むバートルビー的人間を通じて、暴走していく資本主義社会への不満を、そして、想定しうる災害への適切な処置を怠ってきた組織への政治的怒りを明らかにする。他方で、坂手による「バートルビー」の翻案作品は、災害で失われ、時が経つにつれて忘れられていく人々の命を、わたしたち自身の問題として考え続けることで、それを未来に託そうとする想像力にも満ちている。坂手の『バートルビーズ』からは、メルヴィルの生誕から 200 年が経とうとする現在においてもなお、彼が描く「虚無の力」が、時代と国境を超えて多くの人々を様々な形で魅了し続けていることが分かる。

Thesis Abstract

My dissertation will end with an argument of Yoji Sakate's *Bartlebies* (2015) to demonstrate how the power of nothingness in Melville's writings has been handed down. Sakate's play deals with the Great East Japan Earthquake of 2011 and imagines a resurrection of lost humanities in the future. The play also expresses Sakate's political anger toward the institutions that allowed a man-made catastrophe, the radioactive leakage from the nuclear power plant, to occur.